

クリスマスの小さな手紙

彼女の名前はバージニア。100年も前のニューヨークに住んでいた8歳の女の子。彼女は幸せだった。それは彼女のところへは小さいころからいつもサンタクロースがやってきたから。だから彼女は、サンタクロースはいるんだと信じていた。でもほかの子は本当はサンタなんかいないんだといった。

「それが証拠に、サンタを出会った人なんかいないし、煙突から入のを見たひとなんかいないじゃないか」

バージニアは、『ニューヨークタイムス』に手紙を出した。サンタクロースが本当はいないのかどうか教えてほしいと。

「ニューヨークタイムス」の記者はそれを見て、次の日の新聞の社説に返事を書いた。社説の題は、<クリスマスの小さな手紙>。

「どうして、誰も会ったことがないからって、サンタクロースがいないっていえるだろうか、どうして、誰も見た人がないからってサンタクロースが煙突からこなかったっていえるだろうか、僕はこの町のどこかに、この国のどこかに、この世界のどこかに、サンタクロースは本当にいるんだと信じているよ。それが証拠に前の年も、その前の年もサンタクロースが君のところに来てきたじゃないか」

星の好きなあなたに、おはなしのすきなとなりのおねこに、絵本のすきな子供たちに、音楽の好きな「今日とあした」に、夕暮れの街がすきなあなたに、次の年も、その次の年も「クリスマスの小さな手紙」が書けますように

